

聖書：エペソ 4：30

説教題：神の聖霊を悲しませてはいけません

日時：2015年5月24日

今日はイエス様が天から約束の聖霊を注がれたペンテコステを記念する礼拝の日です。イエス様の働きは十字架と復活で終わりではありません。地上の働きを通して勝ち取った権威を持って、イエス様は世界の至高の座である父なる神の右の座に上げられました。そして今やその王座から聖霊を遣わして力強くご自身の支配を始めています。すなわちペンテコステは、イエス様が天の王座について、まことの王としての統治をいよいよ開始された日です。そしてこの日は最終的な天国が現れる前段階とも言うべき終わりの時代の始まりです。私たちは聖霊を通して天上の王と結ばれて、豊かにこの方の恵みの支配に生かされて歩むことができます。今朝は私たちに与えられ、共にいてくださる聖霊に思いを向け、この方を礼拝し、この方に従う思いを新たにさせられたいと思います。

まず今日の御言葉がどんな文脈で語られているかを押さえたいと思います。エペソ書は6章あり、前半の3章が主に教理について、後半の3章が実践について語っています。今日の4章30節は、後半の実践篇に属し、前後関係を見ると確かに新しい人としての生き方が勧められています。直前の28～29節にはこうあります。「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、骨折って働きなさい。悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つ言葉を話し、聞く人に恵みを与えなさい。」その後の31節にはこうあります。「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。」これらの勧めは一般の人々も賛同する道徳的教えと言えます。ではクリスチャンの独特性はどこにあるのか。それはこれらの言葉のただ中に30節があるということです。つまりこれが前後の教えを実行する際の、クリスチャンの歩みの動機付けとなることであるということです。世の人とクリスチャンの違うところは、この30節の御言葉が土台になっていることです。いかにこの30節が、私たちの新しい人としての歩みにおいて大きなカギを握るものであるかが分かります。

さて今日心に留めたい第一のことは、聖霊が私たちの内に住んでいてくださるこ

とです。「聖霊によって証印を押されている」とあります。1章13節：「この方によってあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。」証印とは、それが誰のものかを示すしるしです。当時は家畜や奴隷にも焼き印が押されました。それを見れば、その所有者は誰かが分かりました。それと同じようなしるしとして、神はご自身の民に対しては、聖霊というスタンプを押してくださっているということです。果たして私たちにその証印はあるのでしょうか。聖霊の第一の働きはイエス様を指し示すことです。ヨハネ16章14節：「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」1コリント12章3節：「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ』と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません。」ですからもし私たちがイエス様を私の主、私の救い主として信じ、告白しているなら、その信仰告白をしていること自体が聖霊を頂いている確かな証拠です。その聖霊は私たちの内に住まわれる方として聖書で語られています。そして一旦住んでくださったら、いつまでもともにいてくださいます。私たちのからだは聖霊の宮であるとも言われています。

二つ目に見たいことは、私たちは聖霊を悲しませ得るということです。聖霊はしばしば水や風のイメージで語られたり、聖霊に満たされるといった表現があることから、「物」とか「影響力」のイメージで考えられやすい面があると思います。しかし聖霊は人格を持ったお方です。父、子、聖霊の三位一体の第三人格なる神です。父なる神と同等同質の神です。その神が悲しまれるということが言われています。

歴史の中では、しばしば神の不受苦性が議論されて来ました。神は自律自存の神であり、他者に依存していないお方であり、外部の何かに左右されない満ち満ちた喜びをご自身の内に持っています。私たちは反対に外部の何かに影響されて喜んだり、悲しみに追いやられたりしますが、神にはそのような不完全さや弱さがありません。ところがここに、その神が悲しむと言われています。どういうことでしょうか。確かに神は他の何かによって強制的に悲しみに追い立てられることはありません。ここでもご自分に従わない者は無視して、「わたしはそれらとは関係ない！わたしは自分の内に満ち満ちた喜びを持っている！」としても良いはず。ところが聖霊なる神は、私たちが御心に反する歩みをするると悲しまれるのです。すなわちそうし

ない道も当然選べるのに、あえてご自身から「悲しむ」道に入ってください。これはそれほど私たちのことを心にかけ、愛していてくださるからに他なりません。

では私たちはどのようにしてこの聖霊なる神を悲しませるのでしょうか。聖霊は聖なる霊ですので、そのご性質に反する聖くない歩みによって、と言えます。ガラテヤ書 5 章 19 節から：「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。」また聖霊は私たちが口から出す言葉によっても悲しまれます。エペソ書の文脈では、直前の 29 節でそのことが言われていました。また行ないや言葉だけでなく、私たちの心の中の思いにおいてもそうです。聖霊は私たちの内に住み、私たちのすべてを見て知っておられる方です。その方の前でふさわしくない思いを持つなら、それだけで聖霊は当然悲しむのです。また聖霊は私たちに正しい歩みに進むようと働きかけ、促してくださいます。そういった働きかけを受けながら、それを無視したり、退けるなら、聖霊は悲しむのです。あるいは聖霊はそれはしてはならない、そっちに進んではならない、その罪から離れるようと訴えかけます。その語りかけに耳をふさぎ、自分の思いを通すために聖霊を脇に押し退けて違う方向へ行くなら、聖霊は悲しむのです。本来、悲しみとは何の関係も持たなくて良いはずの聖霊なる神を、私たちは自分の歩みによって悲しませてしまうことになるのです。

ではなぜ私たちは聖霊を悲しませてはならないのでしょうか。三つ目にそのことを見たいと思います。パウロがここで特に述べていることは何でしょう。それは私たちは「贖いの日のために、聖霊によって証印を押されている」ということです。聖霊が私たちの内に住んでいてくださることには明確な目的があります。それは私たちが贖いの日、すなわち神の救いが完成する最後の状態にまで導くということです。聖霊は、そのために「保証」としての役割を果たしてくださるのです。私たちの救いは、イエス・キリストを信じた時点で終わりになるものではありません。確かにその時点で罪の赦しは受けますが、私たちが天国に入る者となるまでには、もっともっときよめられて行かなくてはなりません。聖書が示す最後の贖いが完成した世界は、罪のしみやしわの一切ない世界です。そこは神の正義が住む新しい天と新しい地で、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもありません。私たちはその時に初めて、栄光に輝くイエス様のありのままの姿を見ます。そしてその時、私たち

自身もイエス様に全く似る者に変えられていると聖書は語ります。果たして本当にそんな世界には私に行けるのでしょうか。その望みは聖霊です。この方が私たちの内に住んで、救いの働きを進めて下さって、必ずこの最後の贖いの状態に達するようにと導いてくださるのです。そのことを思ったら、聖霊は私たちにとって何とこの上なくかけがえのないお方だと言うべきでしょう。ですからパウロは、この大事な方を悲しませないようにせよ！と言っているのです。

もし私たちがこの方を悲しませてしまったらどうなるのでしょうか。誰かとの関係においても、その人を悲しませてしまったら、その人との関わりは疎遠なものになってしまいます。ですから聖霊を悲しませることによって、聖霊が下さる様々な霊的祝福を失うことになるのではないのでしょうか。神の愛を十分に確信することができない(ローマ書5章5節)、神の子どもであるとの確信を持たない(同8章16節)、神との平和や救いの喜びを持たない(同14章17節)、「アバ、父」とお呼びして確信をもって神に近づけない(ガラテヤ4章6節)。もしこれらの祝福に十分にあずかっていない、あるいはそれらを失っていると思うなら、それは聖霊を悲しませているためではないのか、と検討してみる必要があるのではないのでしょうか。こうなると私たちはどうなるのでしょうか。聖霊はついに私たちから離れて行ってしまふとまで言うなら、私たちは聖書から外れることになります。先に述べたように、聖霊は私たちのからだを宮として住まわれたら、いつまでも共にいてくださいます。このことは大きな慰めです。しかし、だから何をやっても大丈夫だと偽りの安心感を抱くことはできません。聖霊が私たちを見捨てないということは、私たちを力づくでも正しい道へ引き戻すということです。そのためには厳しい懲らしめを与えるかもしれない。その結果、私たちはそうでなければ経験せずに済む非常な苦境に置かれるかもしれません。ヘブル10章31節：「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」しかし究極的な慰めは、このようなことをしてでも聖霊は贖いの日まで証印となって導いてくださるということです。何というありがたい真理でしょう。聖霊がこのように私たちにとってかけがえのない、いくら感謝しても感謝し尽くせない方であるゆえに、この方を少しでも悲しませることがないように自分の歩みによくよく注意せよ！とパウロは言っているのです。

私たちは今朝、この聖霊と自分との関係を振り返って、もしこの方を軽んじてところがあると思うなら、悔い改めの祈りをささげたいと思います。もし御霊の促し

に従って来なかった自分があるなら、聖霊に謝りたいと思います。そして今日から新しくお従いして、喜んでこの方に導いていただくことができるように。そうするなら、聖霊は益々豊かな恵みをもって私たちを導いてくださるでしょう。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」